

『切韻指掌図』の基礎方言及び撰述年代

山 村 敏 江

0. 序 論

宋代の等韻図『切韻指掌図』¹⁾ (以下『指掌図』と称す) は、伝本の巻首に北宋の司馬光(1019-1086)の序文が見えることから、司馬光の作だと長らく信じられてきたが、清代以降の研究により、作者は司馬光ではなくおそらく偽託であるということが定説になっている。しかし、真の作者や如何なる方言に依拠するのかは、依然として不明である。また、その撰述年代に関しても諸説あるが、南宋にできたという説が一般である。

『指掌図』は、その体裁や入声の配合等に先行の等韻図と大きく異なる点が多々ある。それらは宋代に起こった音韻変化を反映するものであり、そのために広く用いられ、その影響は朝鮮にも及んだ。しかし、その作者が特定できないためか、これまであまり深く研究されてはいない。実際に、現在残っている資料をもとにその真の作者を特定するのはおそらく不可能であろう。しかし、そこに見られる音韻的な特徴から、その依拠する方言を推定することは可能であると考えられる。また、その撰述年代も、その前後の時代の資料と比較することで推定が可能である。そこで本稿では『指掌図』の音韻的特徴から、その基礎方言及び撰述年代の推定を試みる。『指掌図』に関するこれまでの音韻的研究は、前後の時代の韻書、韻図との比較が主だが、本稿ではその他に『皇極経世声音唱和図』、陳與義の詩の押韻状況との比較等、これまでとは異なる視点からの考察を試みる。

なお、本稿は筆者の修士論文「『切韻指掌図』の基礎方言」の一部を加筆、修正したものである。

1. 『指掌図』に関する先行研究

1.1 作者

先に述べたように、伝本の巻首に北宋の司馬光の序文が見えることや、董南一の序文(1203)に「圖蓋先正溫國司馬文正公所述也」と書かれていることから、『指掌図』は司馬光の作だと長らく信じられてきた。しかし、明の桑紹良が『青郊雜著』で「別の人が司馬光の名を騙って後世の信用を得ようとしたのではないか」と疑問を呈したのをはじめとして、清の莫友芝(『韻学源流』)、周斌(『山口新語』)等が司馬光の作ではないとしている。そして、清の同治元年(1862)に鄒伯奇は『切韻指掌図跋』(『鄒徵君存稿』)を書いた際、孫觀が楊仲修のために書いた『切韻類例』の序文と、司馬光の『指掌図』の自序が似ているということを根拠に、この書は司馬光の作ではないと断定した。その後この説が主流となったが、その主な論拠は以下の三点である。

- ①いわゆる司馬光の『切韻指掌図叙』と孫觀の『切韻類例序』(『鴻慶居士文集』卷三十)が雷同していること。そして「治平四年予得旨繼纂其職、書(『集韻』)成上之」の一段が歴史事実に符合しない²⁾、ということ。
- ②『司馬文正公傳家集』に『指掌図』に関する記述が見られないこと。
- ③司馬光の没後から董南一が『指掌図』を刊行した嘉泰三年(1203)までの間、孫觀、鄭樵、沈括、張麟之、晁公武等は誰もこの書に言及していないということ。そして、嘉泰三年より後、その内容に言及する人が出てきたということ。

まず①に関してだが、孫觀の序文と司馬光の序文がほぼ同じであるのは明らかである。しかし、もしこの書が司馬光自らの手によるものだと仮定するならば、成書以前に写本が伝わっていた可能性も否定できない。従って、作ら

れたのが孫覲より後の時代である、という点だけで、この序文は誰が誰から引き写した、と断定するには証拠不十分であろう。だが、この二つの序文で一致するのは主に歴史的事実に合わない部分である。司馬光が自分自身に関することで間違いを書くというのは考えにくい。従って、これは司馬光自らの手によるものではない、ということが考えられるのである。

次に②と③に関してだが、『司馬光伝家集』の中で、『指掌図』に関する記述が見られないことや、司馬光の死後から嘉泰三年(1203)までの間、『指掌図』に言及した等韻学者がいないというのはおかしな事である。もし、多くの人士に用いられ、またその後には与えた影響も大きい書を著したのなら、その関係について記したものがあってしかるべきである。その点からもやはり『指掌図』の作者は司馬光とは断言できない。

ならば、なぜ司馬光の名が冠されているのであろうか。司馬光は人徳があり、また博識で、『類篇』の編纂をするほどの人物であった。もちろんこれは重要な要因だが、それだけではないはずであろう。それに関して、平田昌司1984「『皇極経世声音唱和図』與『切韻指掌図』」(pp.204-210)では、術数家の占術は語音の分析に頼るものであったので、その用途で広く用いられた『指掌図』に、易、律曆、楽律に通曉し、術数家の間では伝説的地位の人であった司馬光の名を冠することで、術数家だけでなく、一般の文士たちに尊ばれるようになった、ということ述べている。

また平田氏は、司馬光と術数家の関係において最も重要な点は、『皇極経世書』を書いた邵雍と往来があったことだと指摘している。南宋以降、『皇極経世』の流れを汲む術数家は皆、司馬光を邵雍の弟子だと信じていた。それは『易通変』、『皇極起数例』等に司馬光は邵雍から易学を伝えられた、という文が見えることからわかる。しかし、『宋元学案』卷十「百源学案下」に「且温公(司馬光)康節(邵雍)老友。非傳学也」との記述もあるように、司馬光が邵雍の弟子であったかどうかは定かでない。それが事実かどうかはともかくとして、この二人の間に往来があったことは間違いのないようである。

以上述べたようなことが『指掌図』に司馬光の名が冠された理由の一つであろうが、真の作者は現在のところ未だ謎である。

1.2 撰述年代

『指掌図』の撰述年代については、北宋説、南宋説、元代説の三説がある。そのうちの北宋説を唱えるのは、『中国音韻学研究』のカールグレンのみである。彼が根拠とするのは司馬光の自序である。しかし、これまでの考証により、この自序は偽作だということがすでに定説となっているため、現在この説を唱える学者は非常に少ない。また、元代説に至っては、趙蔭棠が「事実無根にして言語道断」と切り捨てているように、全く根拠に乏しいのでこの説を唱える学者は皆無である。現在定説となっているのが南宋説で、清朝末期の鄒特夫（伯奇）が最初に唱えたものである。その根拠となるのが、孫觀（1081-1169）が書いた『切韻類例序』と司馬光の自序が雷同していることと、董南一の序文に嘉泰癸亥（1203）と書かれていることである。嘉泰癸亥つまり嘉泰三年（1203）に序文が書かれたということから、『指掌図』がそれ以前に作られたということにおおむね間違いはない。

では、『指掌図』が作られたのはいつ以降ということになるのだろうか。李新魁1983『漢語等韻学』（pp.183-186）、濮之珍1987『中国語言学史』（pp.342-345）では「『四声等子』と『指掌図』の撰述年代に関して、どちらが先かというのは、現在のところ断定するのは難しい。ただ、音韻学的な特徴や体裁の点から見ると、『四声等子』のほうが若干早くできたようである。」と述べている。ただし、『四声等子』自体成書年代に定説がないため、『指掌図』の成書年代を特定するための材料とはならない。

趙蔭棠1957「切韻指掌図撰述年代考」（pp.94-107）では「北方の『四声等子』の影響を受けたとはいっても、楊倓の『韻譜』の成分をも有しているので、南宋淳熙三年（1176）から嘉泰三年（1203）の間のものだと断定した。」と述べている。董南一の序文から嘉泰三年というのはおそらく問題ないであろうが、淳熙三年と断定するには証拠不十分の感を否めない³⁾。どちらにしても、現在のところ『指掌図』の撰述年代を特定することはできない。

1.3 音韻的特徴

『指掌図』の音韻的な特徴として挙げられるのは主に以下の八点である。

- ①『指掌図』には「撮」の名称はないが、その概念に基づいて、中古の十六撮を十三撮にしている。
- ②三等韻と四等韻の合流。『指掌図』は『広韻』の二百六韻を採用してはいるものの、多くの同等の韻が合わせられている。それだけではなく、多くの三等韻と四等韻が合わせられている。
- ③梗、蟹両撮の一等韻と二等韻の合流。
- ④舌尖高母音[ɿ]が既に発生していたこと。第18図の止撮開口では、齒頭音の止韻の字「茲，雌，慈，思，詞」等が、全て一等に置かれている。一等に[i]が置かれることはないので、これは[ɿ]の音が既に発生していたことを説明するものである。
- ⑤十三撮に相配される入声は七類しかなく、一類で一撮を受けているものもあれば、陰、陽の二つの撮を受けているものもある。ある入声韻が陰、陽声韻両方に配されているのは、当時の入声は既に[-k][-t][-p]から[-ʔ]に変化していたことを説明するものである。
- ⑥舌上音と正齒三等音の合流。これは近代の舌上音と正齒三等音の合流の始まりである。
- ⑦正齒二等音と正齒三等音の合流。『広韻』では、これらは異なる声母に属していたが、中古の三十六字母の頃に合流した。『指掌図』ではこの過程を反映している。
- ⑧喻母における三等と四等の合流。等韻図では喻母の三等と四等の二つの声母を合わせて喻母としており、三等の字は三等に、四等の字は四等に置いている。『指掌図』も形式の上ではこの原則に従っているものの、実際にはかなりの混乱が見られる。これは、作者がこれら二つの声母を、既に区別できなくなっていたことを説明するものである。

これらの特徴は、宋代に実際に起こった音韻的変化を反映するものであり、そこに、先行する等韻図との決定的な相違が表れている。これにより『指掌

図』は広く用いられたのである。

2. 前後の時代の韻書，韻図との比較

『指掌図』のその体裁，音韻体系は先行の韻図と大きく異なる。そこに見られる特徴は、『指掌図』の成書年代及び依拠する方言を推定するための重要な材料である。以下，本章では前後の時代の韻書，韻図との比較を通じて、『指掌図』に見られる音韻的な特徴を考察する。

2.1 『広韻切韻譜』との比較

本節では『広韻切韻譜』との比較を行う。『広韻切韻譜』とは，辻本春彦氏が、『音韻闡微』の音図として作ったものを、『広韻』の韻図に作りかえたものである。従って，それぞれの表は『音韻闡微』所載の「音図」と同じ体裁を採っており、『韻鏡』のそれとは違う。しかし、『広韻』の小韻字を並べているという点から，その音韻体系は『韻鏡』とほぼ同じであると言えることができる。『広韻切韻譜』では縦軸の声母は，牙音，舌音（舌頭・舌上），唇音（重唇・軽唇），齒音（齒頭・正齒），喉音，半舌（来母），半齒（日母）の順に並んでおり，横軸は，まず，一・二・三・四の四等に分け，各等を平・上・去・入の四声に分けている。

両者の比較のために、『指掌図』所載の字が『広韻切韻譜』のどの図から採用されているかを調査した。そして同時に、『広韻切韻譜』所載の字が、『指掌図』にどのように収められているのかを体系的に把握するために、『広韻切韻譜』所載の字のうち，どの字が『指掌図』のどの位置に置かれているかを調査した。そして，そこから得られた結果に対して考察を加えた。なお，1.3で述べた『指掌図』の音韻的特徴と重複するものにはここではふれない。

- ①『指掌図』の字の採用方は相補的である。例えば、『指掌図』2図平声三等牙音では『広韻切韻譜』1図平声三等の見，溪，群母の字を採用しているが，疑母には字がないのでその部分のみ『広韻切韻譜』2図

平声三等疑母から採用している。このように『指掌圖』では複数の図から字を相補的に採っているのである。

- ②『広韻切韻譜』では唇音は開口の図に収められているが、『指掌圖』ではそれらは全て合口の図に収められている。このことから、『指掌圖』では唇音字を合口と見なしていることが分かる。唇音は発音する際に口を閉じるので、合口的な発音になるためだと考えられる。
- ③東冬，魚虞，尤幽，談覃，銜咸，鹽嚴凡，山刪，庚耕等の韻が合流している。
- ④15図と16図では曾摂と梗摂が合流している。少なくとも唐代以前は蒸，登韻（曾摂）と庚，耕，清，青韻（梗摂）は決して混同されるものではなかった。それが『指掌圖』で合流しているということは、この時代の語音に大きな変化が起こったことを表している。
- ⑤18図では止摂開口の字と蟹摂齋，祭韻の字を合流させている。また，19図では止摂合口の字と蟹摂一等合口の灰韻，四等合口の齋韻とを合流させている。これは『指掌圖』が表している音と「摂」が既に合わなくなっていることを示している。
- ⑥13図（陽韻）と14図（江韻）の平声正齒二等音は，現代北京方言では共に合口で全く同一の発音になっているが，『指掌圖』で開合を区別しているということは，その時代にはまだ区別があったということであろう。正齒二等音は舌を後ろに引いて発音することから合口になりやすいのであるが，江韻には[-i-]の要素がないので，陽韻よりも合口になりやすかったと考えられる。
- ⑦13図と14図の入声正齒二等音には覚韻の全く同じ字が収められている。これは人工的に開合を区別したものだと考えられる。
- ⑧14図合口の二等に本来は開合の江韻が収められている。この江韻と対応するのが13図の陽韻だが，現在陽韻と江韻を区別し，なおかつ江韻を明瞭な合口に発音する方言はないので，方言音を反映しているとは考えにくい。そうすると，14図入声二等の「覚」[-y-]と調和を取るためにこの図に収めているということが考えられる。どちらにしても人

工的な区別のようなものである。

- ⑨ 4 ㄨ 平声一等明母尤韻「謀」：本来一等に尤韻はないのにこの位置に書かれているのは、元來三等の「謀」（尤韻）が一等に移動しているためである。これは『集韻』で「謀」を侯韻にのみ収めているのに従ったと考えられる。
- ⑩ 6 ㄨ 平声四等透母侵韻「澹」：本来は他兼切で「添」と同音の添韻の字だが、『集韻』では天心切という反切で侵韻にも入っている。また、『韻鏡』でも38ㄨ合口の侵韻に収められている。本字は、『集韻』において侵韻の末尾に収められているが、小韻の中での配列順が後ろであるということは、標準音ではなく、方言である可能性が強い。『指掌ㄨ』でこの字が6ㄨにあるということは、方言（[tien] を [tin] と発音するのは呉語、湘語）を反映するものとも考えられる。ただし、同様の例は他に見られないので、単に『集韻』によっただけということも考えられる。
- ⑪ 8 ㄨ 平声二等牀母先韻「狗」⁴⁾：『韻鏡』では刪韻二等だが、『広韻』では先韻四等である。また『集韻』でも先韻である。本来正齒二等音の位置に先韻が置かれることはない。『指掌ㄨ』で平声二等先韻はこの字のみなので、等位としては『韻鏡』を、韻目としては『広韻』を採り、組み合わせたということが考えられる。
- ⑫ 15 ㄨ 平声四等心母清韻「駢」：息營切で合口であるが、『広韻切韻譜』では開口の33・35ㄨに収められている⁵⁾。『指掌ㄨ』でこの字が合口の15ㄨに収められているということは、反切下字の「營」が合口であることに依っているのであろう。しかし、『韻鏡』では開口の33ㄨにこの字が、合口の34ㄨにこの字と同音の「解」が収められていることから、字としては33ㄨを、音としては34ㄨを採ったという折衷案も考えられる。

以上、『指掌ㄨ』に見られる特徴を述べたわけであるが、それらは実際の語音の変化によるもの(③④⑤⑥)、人工的な処置によるもの(⑦⑧⑪⑫)、『集韻』によるもの(⑨⑩)の三つに大別できる。このようにして見ていくと、『指掌

図』は実際の語音の変化を反映する一方、人工的な処置を施すことで全体的な調和を取ろうとしているように感じられるのである。

2.2 舌上音と正歯音の合流状況

本節では、舌上音と正歯音が『指掌図』においてどの程度合流しているのかを調査し、そこに見られる特徴を考察したい。方法としては、『広韻切韻譜』の舌上音と正歯音が『指掌図』上でどのように移動しているかを調査し、それぞれをタイプ別に考察した。

①舌上二等音と舌上三等音の合流⁶⁾：なし

②舌上二等音と正歯二等音の合流：なし

③舌上二等音と正歯三等音の合流：なし

④舌上三等音と正歯二等音の合流：なし

⑤舌上三等音と正歯三等音の合流：

(1)舌上三等音から正歯三等音への移動

- ・ 1 図上声三等牀母小韻「肇」(澄母に同じ字) → 独韻
- ・ 2 図平声三等牀母鍾韻「重」(澄母から移動) → 独韻
- ・ 2 図去声三等牀母用韻「重」(澄母から移動) → 独韻
- ・ 3 図平声三等穿母虞韻「軀」(徹母から移動) → 独韻
- ・ 3 図平声三等牀母虞韻「廚」(澄母から移動) → 独韻
- ・ 3 図去声三等牀母御韻「筋」(澄母から移動) → 独韻
- ・ 8 図上声三等照母獮韻「轉」(知母から移動) → 合口
- ・ 8 図上声三等牀母獮韻「篆」(澄母から移動) → 合口

(2)正歯三等音から舌上三等音への移動

- ・ 19 図去声三等徹母至韻「出」(穿母から移動) → 合口

⑥正歯二等音と正歯三等音の合流：

(1)正歯二等音から正歯三等音への移動

- ・ 8 図平声三等審母僊韻「栓」(二等から移動) → 合口
- ・ 8 図去声三等審母線韻「纂」(二等から移動) → 合口

- ・ 12㊦上声三等穿母馬韻「纂」(二等から移動) → 合口
- ・ 12㊦上声三等審母馬韻「礎」(二等から移動) → 合口
- ・ 16㊦平声三等牀母蒸韻「菝」(二等から移動) → 開口
- ・ 19㊦上声三等穿母紙韻「揣」(二等から移動) → 合口

(2) 正齒三等音から正齒二等音への移動

- ・ 17㊦上声二等穿母海韻「菑」(三等から移動) → 開口
- ・ 19㊦平声二等穿母支韻「吹」(三等から移動) → 合口
- ・ 19㊦去声二等照母寘韻「惴」(三等から移動) → 合口
- ・ 19㊦去声二等穿母寘韻「吹」(三等から移動) → 合口
- ・ 19㊦去声二等禪母寘韻「睡」(三等から移動) → 合口

以上、『指掌図』において何らかの変化があった字を挙げてみたが、その韻尾自体に共通点は見られなかった。従って、韻尾は舌上音と正齒音の合流の条件とはならないようである。次に別の条件から見ていくと、合流しているものの多くが合口、もしくは [-u] の要素を含む独韻だということがわかる。合口の字は唇を丸くして発音するため、舌が少し奥寄り及び下寄りになる。その結果、捲舌音になりやすいということから、正齒二等音と正齒三等音の合流は円唇性の母音の所から始まったと考えられる。また、『古今韻会挙要』では舌上音と正齒三等音、正齒二等音と正齒三等音は完全に合流しているが、『指掌図』では区別している㊦もあるので、時代的には『指掌図』の方が早いということがわかる。

董同龢1993『漢語音韻学』(pp.185)では『指掌図』の舌上音と正齒音の合流について述べた後、「知章両系の合流は宋代に普遍的に見られる現象である。」と述べているが、『指掌図』においては全く合流が見られない㊦もあるので、『指掌図』は過渡期のものだと考えられる。先に述べたように、舌上音と正齒音の合流は円唇性の母音の所から始まると考えられるので、その初期の段階を反映している『指掌図』の成書年代は比較的早く、場合によっては南宋まで下らないということが考えられるのである。

2.3 入声の配合, 合流状況

本節では『指掌圖』における入声の配合状況から、入声の音韻的な変化を考察したい。

元来入声は陽声韻にのみ相配されるものである。しかし、『指掌圖』では[-p]韻尾の入声は先行の等韻図同様に陽声韻に相配されているが、[-k][-t]韻尾の入声は、陽声韻だけでなく陰声韻にも相配されている。それに関して、董同龢1993『漢語音韻学』(pp.184)では以下のように述べている。

『切韻指掌圖』で流撮の入声に徳、櫛、質韻を配していることから、流撮の主母音が[u]から[əu]に変化していたことが分かる(徳韻が櫛、質の系統に入っているのは止撮開口、臻撮開口も同じである。これは、櫛、質韻に相当する一等の字がないためであり[-k]と[-t]が合流していたことを示すものではない。従って、これらを除けば『切韻指掌圖』は中古音の[-k][-t][-p]をきちんと分けていたということになる)。

董同龢は櫛、質韻に相当する一等の字がないため、徳韻を配していると述べている。つまり、人工的な処置だと考えているわけである。しかし、櫛、質韻に相当する一等韻がないからといって、徳韻を配する必然性はない。従って、徳韻と櫛、質韻の韻尾が合流して声門閉鎖音[-ʔ]に変化していた、と考える方が自然である。

また、董同龢の言うように中古音の[-k][-t][-p]をきちんと分けていたというのなら、わざわざ入声を陽声韻だけでなく陰声韻にも相配させる必要はないはずである。従って、この当時、入声は多少の弱化、及びそれに伴う声門閉鎖音[-ʔ]への変化を生じていたと考えられるのである。

また、王力1998『漢語音韻』(pp.112)では、『指掌圖』の9図で徳韻と痕韻を相配させていることを根拠に、この時既に入声は消滅し始めていたと述べているが、必ずしもそうではない。[-k][-t]が声門閉鎖音[-ʔ]に変化していたと仮定するなら、徳韻と痕韻を相配させることに特に問題はない。『指掌圖』で入声を陰陽両方に相配させているということは、[-k][-t]韻尾が声門閉鎖音[-ʔ]に変化していたことと、それに相配される平、上、去声の主母音の調

和を重視した結果だと考えられる。ただし、徳韻と櫛、質韻の合流以外に混乱は見られないことから、規範たるべき音を示すという韻図としての性格が表れていると考えられるのである。

以上のことから、『指掌図』当時[-k][-t]韻尾の入声は声門閉鎖音[-ʔ]への変化とそれに伴う合流を生じ始めており、[-p]韻尾の入声にはまだ大きな変化はなかったと考えられるのである。

3. 『皇極経世声音唱和図』に反映される音韻体系との比較

『指掌図』の成書年代が北宋か南宋かはともかくとして、宋代に書かれたものである以上、やはり宋代の文化的政治的中心地である汴洛一帯の音との比較をするべきであろう。宋代、特に初期の汴洛音を考察する上でその主な材料となるのが、唯心主義哲学者邵雍(1011-1077)が著した『皇極経世書』中の「声音唱和図」である(以下、「声音唱和図」と称す)。

邵雍の祖先の本籍は范陽(現在の河北省涿県)であるが、30歳以降の約30年間を伊水(河南)と洛陽の間で過ごしたという。従って、彼の発音は洛陽音に基づいていると考えられる。このことから、「声音唱和図」は北宋の文化的政治的中心地である汴洛一帯の音を反映していると考えられる。南宋になり都が杭州に移っても、文士は汴京を正統の都と考えていたのであるから、『指掌図』が北宋に出来たものだと仮定した場合はもとより、南宋に出来たものとした場合も、汴洛音を反映していることは十分考えられる。そこで、本節では『指掌図』と「声音唱和図」との比較を行う。方法としては、「声音唱和図」と『指掌図』に共通する音韻的特徴を述べた上で、「声音唱和図」の推定音価を『指掌図』に当てはめる。その際、平山久雄 1995「邵雍『皇極経世声音唱和図』の音韻体系」所載の推定音価を使用した。

3.1 『指掌図』と「声音唱和図」に共通する特徴

「声音唱和図」は術数の占術に使用するものであるため、等韻図とは異なる

点が多い。「声音唱和図」に見られる音韻的特徴のうち、『指掌図』と共通するものとして以下の七点が挙げられる。

- ①止摂と蟹摂三、四等の合流。
- ②果摂と假摂の合流。
- ③曾摂と梗摂の合流。
- ④入声を陰声韻にも配していること⁷⁾。
- ⑤唇音を全て合口扱いとしていること。
- ⑥舌尖高母音[1]が既に発生していたこと。八音の「自」、九音の「思」「寺」は本来四等に置かれるものである。これらが開(一等)に置かれているということは、その母音が[1]に変化したことを表している。
- ⑦喻母三等の一部が匣母と合流したこと。「雄」が「香」と対応しているということによる。これは『集韻』で「胡弓切」としているのと一致する。

以上の特徴には先行する韻図とは大きく異なる点はいくつか見られる。まず、舌尖高母音[1]の発生に関してだが、B. カールグレン 1966『中国音韻学研究』(pp.21)の訳注には「18図齒頭音の茲, 雌, 慈, 思, 詞を一等に置いているのに至っては、『四声等子』や『切韻指南』でも見られないことであるから、北宋の人が作ったものではないようである」と書かれている。しかし、北宋に書かれた「声音唱和図」でも止摂四等齒頭音の自, 思, 寺を一等に置いていることから、『指掌図』が北宋に作られたという可能性は十分考えられる。

次に入声の配合に関してだが、周祖謨1966「宋代汴洛語音考」(pp.600)では「入声は本来『広韻』では陰声韻には相配されないものであるが、この図(「声音唱和図」)では陰声韻全てに入声相配されている。これは、入声字の韻尾が既に無くなっていたため、その母音と相配される陰声韻とが近くなっていたか、或いは同じになったので、相配させたということである。」と述べている。しかし、筆者は邵雍の時代にはまだ入声保存されていたと考える。もし、入声韻尾が既に無くなっていたのなら、『中原音韻』のように入声字を平, 上, 去声それぞれに分配するのが自然であろう。しかし、「声音唱和図」では入声の欄を設けているのだから、入声が陽声韻に配されていないということ

だけで入声韻尾が既に無くなっていたとは言い切れないのである。だが、この時代の入声は[-k][-t][-p]の三種をきちんと区別していたとは限らない。「声音唱和図」では[-k][-t]韻尾の入声は陰声韻にのみ相配されているが、[-p]韻尾の入声は陽声韻の深，咸摂に相配されている。『指掌図』でも[-p]韻尾の入声は陽声韻の深，咸摂に相配されているのに対し，陰声韻に相配されているのは[-k][-t]韻尾の入声であることから，[-p]韻尾はまだきちんと残っていたことや，[-k][-t]韻尾の弱化と声門閉鎖音[-ʔ]への変化，及びそれに伴う[-k][-t]韻尾の合流が始まっていたことが考えられるのである。

また、『指掌図』と「声音唱和図」の入声の相配になぜ違いが見られるのか，ということに関してだが，『指掌図』で入声を陰陽の両方に相配しているというのは，主母音の調和と伝統的な等韻学とのバランスを取ったものであり，「声音唱和図」で入声を陰声韻にのみ相配しているというのは，入声韻尾よりも主母音の調和に重きを置いた結果だと考えられる。どちらにしても，陰声韻に相配される入声は，その主母音が陰声韻と大体同じであったということになる。

最後に唇音を全て合口扱いにしている事に関してだが，周祖謨は「宋代汴洛語音考」(pp.600)で「唇音の声母を発音する際，唇がやや丸くなるため合口と違いがなくなるからであろう。」と述べている。唇音を合口扱いにするということは，唇を使って調音するということを重視した結果であり，現実の音を反映しようという意識の表れではないかと考えられる。

3.2 「声音唱和図」との比較

本節では，「声音唱和図」の推定音価を『指掌図』に当てはめることで，『指掌図』の音韻体系を総合的に考察する。

次ページの表は，『指掌図』の二十図総目に平山久雄氏の推定音価を当てはめたものである。二十図総目というものは，各図の第一行，つまり牙音無声無気音（見母）の字を一覧表にしたものである。これを見ればどの韻がどの図に入っているかすぐにわかるので，『指掌図』の音韻体系を総合的に把握す

るのに非常に便利である。各々の漢字の下に書かれているのが、平山氏による「声音唱和図」の推定音価である。ただし、「声音唱和図」にない字の音価は、音韻論的解釈に従って推定した。表中の(1)から(22)がそれである。紙面の都合により個々の解釈全てを載せることはできないので、問題となる箇所のみ記す。なお、/j/は声母の含む口蓋化要素、/C+韻母/はその音節に該当する字がないと見られる場合の、理論上の音価である。上・去声は平声で代表させる。

以下、いくつか問題になる箇所について述べる。数字は表中のものと対応している。

(1)模韻と魚韻が同列に並べられているということは、これらが『指掌図』においては同一の音になっていたか、近くなっていたことを表していると考えられる。

(8)「江」は古双切で本来は開合である。平山氏はこの字を/kjag/と推定しているが、『指掌図』では合口に収められているので/kjuag/とする。

(10)曾，梗攝の一，二等が合流した結果，本来二等に置かれるべき「觥」が一等に置かれている。入声も同様である。

(13)平山氏の推定音価では「傀」は/kuai/であるが、『指掌図』で19図に収められていることから，ここでは/kuəi/とするのが妥当である。

(14)平山氏はこの位置に字を挙げていないが，その推定音価/Ciuəi/から，/k+iuəi/で「帰」を/kiuəi/と推定した（四等「圭」もこれに準ずる）。

(19)平山氏はこの位置に字を挙げていないが，その推定音価/Cjuawk/から/k+juawk/で「覚」を/kjuawk/と推定した。ただし，「覚」は古岳切で本来は開合だが，『指掌図』では合口に入っている。これは14図平声二等に「江」が配されているのに合わせて合口扱いにしたためと考えられる。

上記のような修正をした結果，『指掌図』と「声音唱和図」の音韻体系は大體一致することが分かった。一致しない部分は『指掌図』の人工的な処置によるものと，「声音唱和図」以降の変化を反映するものだと考えられる。

また，この表から『指掌図』において，入声は平・上・去声と主母音が同

表 「指掌図」と「声音唱和図」の音韻体系の比較

	平 声				入 声			
	一等	二等	三等	四等	一等	二等	三等	四等
独 1	高 kau	交 kjau	嬌(=驕) kiaü	驍 kjiaü	各 kawk	覚(=角) kjawk	脚 kiawk	○ Cjiawk
独 2	公 kəwŋ	○ Cjəwŋ	弓 kiəwŋ	○ Cjiəwŋ	谷(=穀) kəwk	○ Cjəwk	菊 kiəwk	○ Cjiəwk
独 3	孤 kuə(1)	○ Cjuə	居 kiə	○ Cjiə	谷(=穀) kəwk	○ Cjəwk	菊 kiəwk	○ Cjiəwk
独 4	鈎 kəu	○ Cjəu	鳩 kiəu	糶 kjəu	緘(平:黒) kəc(15)	○ Cjət	訖 kiət	吉 kjiat
独 5	甘 kam	監 kjam	○ Ciam	兼 kjiam	閤 kap	夾(平:甲) kap(16)	劫 kiap	頰 kjiap
独 6	○ Cəm	○ Cjəm	金 kiəm	○ Cjiəm	○ Cəp	○ Cjəp	急 kiəp	○ Cjiəp
開 7	干 kan	姦(平:間) kjan(2)	韃(平:言) kian(3)	堅 kjian	葛 kat	戛 kjat	揭(=傑) kiat	結 kjiat
合 8	官 kuan	關 kjuan	勦(平:権) kiuan(4)	涓 kjuan	括 kuat	刮(=刮) kjuat	厥 kiuat	缺(平:血) kjuat(17)
開 9	根 kən	○ Cjən	斤(平:巾) kiən(5)	○ Cjiən	緘(平:黒) kəc	○ Cjət	訖 kiət	吉 kjiat
合 10	昆 kuən	○ Cjuən	君(平:爵) kiuən(6)	均 kjuən	骨 kuat	○ Cjuat	豕(平:屈) kiuət(18)	橘 kjuət
開 11	歌 ka	加(=家) kja(7)	迦 kia	○ Cjia	葛 kat	戛 kjat	揭(=傑) kiat	結 kjiat
合 12	戈 kua	瓜 kjua	○ Ciuā	○ Cjiuā	括 kuat	刮(=刮) kjuat	厥 kiuat	缺(平:血) kjuat
開 13	剛 kaŋ	○ Cjaŋ	薑 kiaŋ	○ Cjiaŋ	各 kawk	○ Cjawk	脚 kiawk	○ Cjiawk
合 14	光 kuāŋ	江 kjaŋ(8)	性 kiuāŋ(9)	○ Cjiuāŋ	郭 kuawk	覺 kjuawk(19)	獲 kiuawk	○ Cjiuawk
合 15	觥 kjuəŋ(10)	肱 kuəŋ	○ Ciuəŋ	肩(平:傾) kjiuəŋ(11)	觥(平:劃) kjuəc(20)	国 kuəc	○ Ciuəc	郟(平:殂) kjiuəc(21)
開 16	桓(平:恒) kəŋ(12)	庚 kjəŋ	驚(=京) kiəŋ	經 kjieŋ	緘(平:黒) kəc(15)	格 kjəc	殛(平:戟) kiəc(22)	激 kjiəc
開 17	該 kai	皆 kjai	○ Ciai	○ Cjiai	葛 kat	戛 kjat	○ Ciat	○ Cjiat
開 18	○ Ci	○ Cji	基 kii	鷄 kjii	○ Cət	○ Cjət	訖 kiət	吉 kjiat
合 19	傀 kuai(13)	○ —	帰 kiuəi(14)	圭 kjiuəi	骨 kuat	○ Cjuat	豕(平:屈) kiuət(18)	橘 kjuət
合 20	○ —	乖 kjuai	○ Ciuai	○ Cjiuai	○ Cuat	刮(=刮) kjuat	○ Ciuat	○ Cjiuat

注：同音異体字の場合は (= @)

平山氏が挙げた字と異なる場合は (平: @)

じものを相配させたということが分かる。その他に注目すべき点として、『指掌図』では[-i]で終わるものには[-t]韻尾の入声、[-u]で終わるものには[-k]韻尾の入声相配されているということが挙げられる。これは[-i]と発音すると舌面と硬口蓋が接近するので[-t]が発音しやすくなるため、及び[-u]と発音すると前舌面が下がり舌根が持ち上がるので、[-k]が発音しやすくなるためだと考えられる。

3.3 まとめ

以上、『指掌図』と「声音唱和図」との比較を行った。その結果、多少の修正を必要とするものの、その音韻体系は概ね一致するとの結論に達した。しかも、3.1で見たようにこの二書に共通する特徴には、前後の時代の韻書、韻図に見られないものも含まれており、その意味でもこの二書が時代的、地理的に近いものだと言うことができる。従って、『指掌図』は「声音唱和図」より少し後の時代に書かれたもので、汴洛一帯の音を反映していたと考えられるのである。

4. 陳與義の詩に見られる入声の押韻状況との比較

陳與義の字は去非、号は簡齋で、洛陽の人である。北宋の哲宗元祐五年(1090)に范陽で生まれ、南宋の高宗紹興八年(1138)に湖州で没した。

周祖謨1966「宋代汴洛語音考」(pp.582)によれば「声音唱和図」の音韻体系と陳與義の詩の音韻状況は一致するという。また、前節で考察したように、「声音唱和図」と『指掌図』の音韻体系も割合よく一致する。ならば、陳與義の詩の押韻状況と『指掌図』の音韻体系が一致していても不思議ではない。

一般に入声は閉塞する感を与えるので脚韻として使われることは多くない。しかし、陳與義の詩には割合よく入声字が脚韻として使われている。また、『指掌図』の入声の配合には特色があることから、本節では陳與義の詩における入声字と、『指掌図』の入声韻とを比較する。

方法としては、『陳興義集校箋』から脚韻として用いられている入声字を取り出し、それらが『広韻切韻譜』と『指掌図』でどの位置にあるかを調査した。その際、韻尾に[-k][-t][-p]の区別があるものと、混用しているものとに分けて考察を行った。

『指掌図』と陳興義の詩で一致するところは、

- ①『広韻切韻譜』の1, 2図に収められている字を押韻させている（『指掌図』では2, 3図）。
- ②『広韻切韻譜』の21, 23図に収められている字を押韻させている（『指掌図』では7, 11図）。
- ③『広韻切韻譜』の22, 24図に収められている字を押韻させている（『指掌図』では8, 12図）。
- ④『広韻切韻譜』の33, 35, 42図に収められている字を押韻させている（『指掌図』では16図）。

このうち④は曾・梗撮の合流を示すものであり、重要な共通点である。

[-p]のみ	9
[-t]のみ	8
[-k]のみ	36
[-t][-k]混合	10
[-p][-t]混合	1
[-p][-k]混合	0
[-p][-t][-k]混合	1
計	65

押韻字の等位について特に共通点は見られなかった。詩の場合は韻図と完全に合致するほど厳密に押韻しているわけではなく、主母音と韻尾の調和に重点を置いているので、このような状況になるのであろう。

左記の表は陳興義の詩に見られる入声かどの韻尾と押韻しているかをまとめたものである。『指掌図』では、[-k][-t]韻尾の入声の一部（徳韻と櫛，質韻）合流しているが、陳興義ではさらに合流が進んでいる。これは『指掌図』が陳興義より前の時代に出来たということを表している。

さらに、[-k][-t][-p]の混用が見られるのが特徴的である。『指掌図』では依然として[-p]韻尾の入声は独立しているので、これが[-k][-t]と混用されていることから、『指掌図』は陳興義の時代より前に出来たということが分かるのである。

5. 結 論

5.1 基礎方言

3.では「声音唱和図」に反映される音韻体系との比較を通じてその方言的な特徴を考察した。「声音唱和図」は北宋の汴洛一帯の語音を反映するものと考えられているが、その音韻体系は『指掌図』と割合よく合致するものであった。従って、「声音唱和図」と同様に『指掌図』も汴洛一帯の音を反映するものであったとの結論を出した。4.では陳與義の詩に見られる入声の押韻状況との比較を行った。その結果、多少のずれはあったが、これは詩の押韻と韻図という性格の違いに起因すると考えられるので、それを考慮すれば両者の音韻体系は割合一致するものであった。以上のことから、『指掌図』は汴洛一帯の語音を反映するものだという結論に達した。

5.2 撰述年代

3.2では『指掌図』と前後の時代の韻書、韻図との比較と通じて、『指掌図』に見られる特徴を考察した。その中の2.2で舌上音と正歯音の合流状況について述べた際に、その合流が一部にのみ見られるということから、『指掌図』の成書年代は比較的早く、南宋まで下らない可能性もある、という結論を出した。3.では「声音唱和図」に見られる音韻的な特徴や体裁から、『指掌図』の撰述年代を推定した。「声音唱和図」は北宋に書かれたものだが、そこに舌尖高母音[ɿ]の発生や、入声の声門閉鎖音[ʔ]への変化を見ることができる。これは『指掌図』にも共通する特徴であるので、『指掌図』が北宋にできたということは十分に考えられるという結論を出した。4.では陳與義の詩における入声字との比較を行った。陳與義の詩では[-k][-t]の合流だけでなく、[-k][-t][-p]の合流までもが見られる。『指掌図』では[-k][-t]の一部合流が見られるのみなので、『指掌図』は陳與義より前の時代、北宋にできたものだ

という結論を出した。以上のことから、『指掌図』の撰述年代は「声音唱和図」より少し後、つまり司馬光の時代だとの結論に達した。

注

- 1) 本稿では、1962年12月に中華書局が音韻学叢書本を影印、刊行したものと、1986年に中華書局が刊行した宋の紹定本を使用した。これは、前者が最も整っているということと、後者が最も古いということによる。考察の際には、これらを相互対照した。なお、文中で明記してあるもの以外は、音韻学叢書本によっている。
- 2) 丁度、李淑、賈昌朝、王洙等が編纂した『集韻』が完成したのは、仁宗景祐四年(1037)である。また、『類篇』の編纂が始まったのは宝元二年(1039)であり、王洙、胡宿、范鎮、司馬光等の編集により、治平四年(1067)に完成した。『集韻』は音を主にしたものであり、『類篇』は形を主にしたもので、その体裁も異なり、編纂した人もその時期も異なる。司馬光の序文に「継纂其職」とあるのは、范鎮の編纂する『類篇』の職を継いだということであって、丁度等が編纂した『集韻』の職を継いだということではない。しかも、司馬光が范鎮の職を継いだのは治平三年(1066)二月のことで、その時には『類篇』は既に完成していて、浄書しているところであり、明るる年の十二月に奏上したのである。司馬光、孫覿の序文では、このことに関して混乱が見られる。
- 3) 淳熙三年(1176)前後の事柄に関する記述は、董南一が淳熙二年(1175)に進士となったことと、楊俛が淳熙三年(1176)に太平知州に任ぜられたことしかない(『切韻指掌図』は北方の『四声等子』の影響を受けたばかりでなく、字母の配列方法が、一字母一行の36行であることなど、『韻譜』の成分も持っている。『韻譜』を作った楊俛は淳熙三年に太平知州に任ぜられ、その後の功績は誰もが認めるものであった」と書かれている)。しかも、「董南一が序文を書いたのは彼が進士となって28年後のことで、その年回りなら間違いはない」と書くのみで、これを根拠とするのは余りにも頼りない。それとも、進士になったことで様々な書物を目にする機会が増えたから、ということなのだろうか。どちらにしても、淳熙三年(1176)以降と断定するには証拠不十分と言わざるを得ないのである。
- 4) 藝文印書館1989『等韻五種』では「𪛗」(士山切：山韻)。
- 5) 合口の34・36図に収めるべきである。
- 6) 元来舌上二等音と三等音は同一の図には置かれるものではない。しかし、『指掌図』では同一の図に置かれる例も少数ではあるが見られるので、この項目を設けた。
- 7) 『指掌図』では全ての陽声韻、陰声韻に入声が配されるが、「声音唱和図」では陽声韻のうち入声は配されるのは深・咸攝のみである。

参考文献・資料

- B. カールグレン 趙元任・羅常培・李方桂合訳, 1966, 『中国音韻学研究』, 商務印書館
- 宋・陳彭年等, 1994, 『校正宋本廣韻附索引』, 藝文印書館
- 陳新雄, 1991, 『等韻述要』, 藝文印書館
- 宋・陳與義 白敦仁校箋, 1990, 『陳與義集校箋 上・下』, 上海古籍出版社
- 宋・丁度等, 1989, 『宋刻集韻』, 中華書局
- 董同龢, 1993, 『漢語音韻学』, 文史哲出版社
- 平田昌司, 1984, 「『皇極經世声音唱和図』與『指掌図』」(『東方学報』56)
- 平山久雄, 1995, 「邵雍『皇極經世声音唱和図』の音韻体系」(『東洋文化研究所紀要』第120冊)
- 胡裕樹主編, 1992, 『中国學術名著提要・語言文字卷』, 復旦大学出版社
- 明・黄宗羲, 1983, 『宋元学案』卷九・十, 世界書局
- 李榮, 1952, 「皇極經世十声十二音解」(『切韻音系』), 中国科学院
- 李新魁, 1983, 『漢語等韻学』, 中華書局
- 濮之珍, 1987, 『中国語言学史』, 上海古籍出版社
- 宋・邵雍, 1989, 『皇極經世書』(『四部備要』), 中華書局
- 辻本春彦, 1986, 『広韻切韻譜』, 均社
- 王力, 1998, 『漢語音韻』, 中華書局
- 趙蔭棠, 1957, 「切韻指掌図撰述年代考」(『等韻源流』), 商務印書館
- 中国大百科全書総編輯委員会, 1988, 『中国大百科全書・語言文字卷』, 中国大百科全書出版社
- 周祖謨, 1966, 「宋代汴洛語音考」(『問学集 下』), 中華書局